

中国トルファン地区博物館における展示協力について

－自治体国際協力専門家派遣事業に参加して－

井 上 尚 明

はじめに

中国新疆ウイグル自治区トルファンは、シルクロードの天山北路と天山南路の分岐点にあるオアシス都市である。一般的にトルファンと呼ばれているのは、トルファン市を指すが、広域的にはトルファン市・鄯善県・克遜県をあわせてトルファン地区と呼ぶ。トルファンを有名にしているのはシルクロードの要衝であり、各時代の多くの遺跡が密集し、さらに火焰山や蜃気楼が揺らめく砂漠など、自然景観的にも優れていることで、中国西域観光には欠かせない、日本人にも良く知られた街である。

今回の派遣は、総務省の外郭団体である(財)自治体国際化協会の自治体国際協力専門家派遣事業に伴うもので、トルファン市内に建設中の新しい地区博物館における、展示や資料の取扱いに関する協力のためである。僅か2週間の短い期間であったが、当館における国際協力の例として、トルファンの歴史や文化・街の様子なども交え、地区博物館での活動を記録しておきたい。

1 トルファンの概況

(1)自然環境



火焰山

日本からトルファンまでの一般的なルートは、北京か上海などで国内線に乗り換えウルムチまで行き、そこからは自動車でトルファンに至るもので、通常2日の行程が必要である。トルファンは天山山脈の南麓に広がる広大な盆地にあり、盆地の中心である艾丁湖は標高-154mと、世界で2番目に低い土地である。北東にはゴビ砂漠・南西にはタクラマカン砂漠が広がり、市街地を離れると直ぐに砂漠に至る。ウルムチからトルファンまでの道路の両側には、荒涼とした大地が延々と続き、白く光る塩湖や約250基の風力発電機が風で回転する風景が眼前に広がる。

夏の最高気温は48℃を超え、地表温度は80℃に達し、中国では最も暑い地方であるとともに、冬は-30℃と寒暖の差が激しい地域である。砂漠地帯であるため、年間降水量は20mmに足らず、湿度は低く乾燥している。このような環境や歴史的な呼称から、火州・緑州・西州とも呼ばれ、市内ではこれらを冠にしたホテルやレストランを多く見かける。

緯度では北海道南部あたりに、経度はインド東部～バングラディッシュに相当する。しかし、北京時間を標準としているため、実際の日照時間と時計で見る時間に誤差が生じ、夏季では朝9時こ

ろまで暗く、夜は9時ころまで明るい。私が勤務していた10月でも、勤務時間は午前が10:00から13:30まで、午後が15:30から20:00であり、博物館を出るころはまだ明るい。なお、日本との時差は1時間であるが、実際の日照時間との間にズレがあることは前述のとおりで、朝9時位になってようやく街が賑やかになり、午後3時ころの気温が最も高く日差しも強く感じる。朝食が9時・昼食が2時・夕食が8時前後が一般的であろうか。歓迎会なども夜8時開始が多く、街の飲食店は夜中の11時ころまで賑やかである。



風力発電所

夏は過酷であるが、観光シーズンでもあり日本人を含む海外からの観光客はこの時期に集中している。10月には、昼間はTシャツで、朝・夜はカーディガンを羽織れば比較的過ごし易い季節であったが、観光的にはシーズンも終わり、日本人の団体には遭遇しなかった。しかし、ヨーロッパ人や韓国・台湾人の団体観光客は多く見かけ、日本人の観光の仕方や情報の偏りを感じることができる。市街地には高層ビルこそないが、並木と歩道が両側にある広い道や、歩道の上に架けられた葡萄棚など緑豊かな街でもあり、バザールに

は多くの果物が溢れている。天山山脈の雪融け水を利用した果物や綿花の栽培が盛んで、郊外には水路に沿って葡萄畑が連なり、干葡萄をつくる小屋である晾房が点在するこの地方独特の農村風景を見ることができる。砂漠に囲まれたオアシスには、豊かな緑が広がっているのである。

(2)生活文化

トルファンの民族構成は、ウイグル族が7～8割・漢族が2割程で、他にカザフ族・回族などが住んでおり、ウイグル族などの多くはイスラム教徒である。街の各施設や店舗の看板などはウイグル語と漢字表記がされているが、高昌故城周辺などの郊外のウイグル族居住地区では漢字を見ることもほとんどなく、道を歩く人々・街並みの景観など中国とは思えない風景である。この様な地域では中国語が通じない場所も少なくない。宿泊していた博物館近くのホテルでも、朝7時20分前後になるとモスクから流れるコーランの音が聞こえ、まだ暗い街の中で礼拝をしている姿をぼんやりと見ることができる。私が着任した日はラマダン明けで、イスラム教徒達の祝日でもあり、縁起が良いとされる偶数の日には民族音楽を響かせた結婚式の車列を何組か見た。



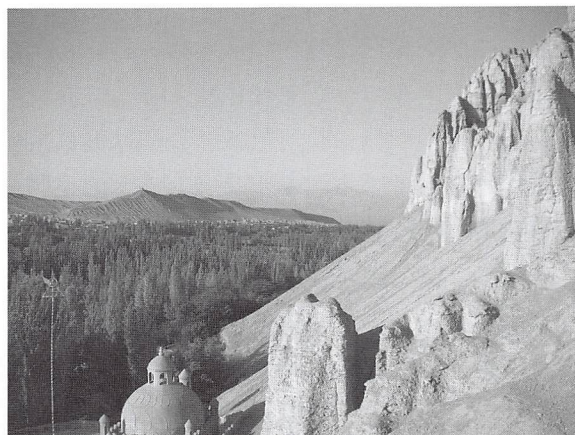
トルファンのバザール

市内には比較的大きなバザールが2ヶ所あり、大きなアーケードの中には、食料品を中心に生活必需品が所狭しと並んでいる。特に葡萄やハミ瓜をはじめとした果物が豊富で、葡萄・イチジク・トマトなどの乾燥果物が有名である。中でも干葡萄の種類は覚えきれないほどで、色とりどりの葡萄が並んでいる。

葡萄栽培は市街地にまで及び、歩道の上・博物館やホテルの庭・公園などにも葡萄棚が架けられ、8月には葡萄祭りがある正に葡萄の街である。火焰山を南北に縦断する葡萄溝という地域は、その名のとおり葡萄栽培が盛んなところで、水路の両側に集落と葡萄畑が広がっている。葡萄溝は観光地にもなっており、葡萄園入口周辺には干葡萄屋がずらりと並んでいる。



葡萄畑に点在する晾房



葡萄溝の風景

食事については、シシカバブー・ナン・バンミエンなど、イスラム・ウイグル料理が主体的であり、豚を食さないイスラム教徒用の羊肉を中心とした料理である。もちろん漢族や観光客用のレストランも多く、通常の中華料理も少なくない。厳格なイスラム教徒は酒は飲まず煙草も吸わないし、ラマダンの期間は閉める飲食店もある。一般的にビールを飲む習慣がなく、ウイグル族だけではなく、漢族も好んで白酒を飲んでおり、葡萄の産地だけあってワインも美味である。通常は博物館の食堂で昼食を食べていたが、ほぼ毎日麺にトマトやピーマンを炒めた具と羊肉をかけて食べる、バンミエンと呼ばれるウイグル料理である。価格はバンミエンにシシカバブー付で8元位（1元約15円）である。シシカバブーを焼く時には、強烈な煙と香辛料の匂いが出るため、道端や店の裏で焼くことが多く、食事時には香ばしい香りが町中に漂っている。

交通機関は、トルファンには鉄道の駅もあるが、市街地から遠く不便なため観光客の大部分はウルムチから自動車でトルファンへ来る。長距離バスの本数も多く、バスでウルムチまでは約3時間で料金は40元程であり、地元の人はこのバスを利用している。市内では路線バスは見かけなかったが、交通図では市内に8路線ほどあるようである。遺跡や観光地は郊外に多いため、個人で移動する場合はタクシーを使うことになる。しかし、観光客の中心は団体客であり、ホテルから団体バスで観光地めぐりをすることが一般的であろう。トルファンでは主に博物館の四輪駆動車などで移動したが、自由時間のあったウルムチでは、タクシーで市内を走るとだいたい10円で、路線バスは1元が相場であった。特にバスはたくさんの路線があり、時刻表の無いバス停でも心配の無い位頻繁に発着している。ウルムチは人口200万人の大都会で、生活様式もトルファンとはかなり異なっている。気候もトルファンとは違い、雨にも遭遇した。ウルムチにある自治区博物館は、国立博物館並の規模で、日本でも展示された楼蘭のミイラなどが展示してある。ここでは、館長・副館長に面会し、博物館の現状などの説明を受け、新たな試みとして日曜日に無料開館したことで、入館の順番待ちができるほどになったことなどの話を聞いた。また、ウルムチでは久しぶりの自由時間を利

用して、タクシーやバスを乗り継ぎ一人でバザールやデパート・本屋などを巡り、老眼鏡をつくったり床屋に行くこともできた。因みに床屋は洗髪付きで8元である。

トルファンは、北京や上海のような大都市と比べると物価も安く、街の雰囲気も西域でありながらどこか懐かしい感じがする地方都市である。銀行やホテルのある大通りを一歩それると、舗装されていない細い道や日干し煉瓦の家並みが続き、白い髭のイスラム教徒のおじいさんが歩いている風景に出会うことができる。しかし、シルクロードの観光地でもあり、高級ホテルのショップでは桁を間違えるほど高価な刺繍や絨毯を売っている。これからも街は発展していくであろうが、雄大な光景をバックにゆっくりと走るロバ車のような風情は残してもらいたいものである。

(3)文化財

トルファン地区博物館の展示は、約4万年前の石器から始まる。彩陶や青銅器時代の遺跡も少ないが、トルファンを代表する多くの文化財は、やはり魏氏高昌国や唐の西洲時代の遺跡や遺物である。市の西側に交河故城、東には高昌故城やアスターナ古墳群などがあり、砂漠の中に多くの遺跡が点在している。トルファン出土の遺物群は、トルファン地区博物館や新疆ウイグル自治区博物館に展示・所蔵されているほか、日本の大谷探検隊、イギリス・フランス・ドイツなどの探検隊も多くの文物を持ち帰っており、アスターナ出土の文書群などが、世界12カ国に分散している。これらの多くの文物は、敦煌学と並びトルファン学として独立するほどの質・量を持っている。トルファン地区博物館は、トルファン学研究院と一体となった組織であり、展示・保存・公開だけでなくトルファン出土文物の研究センターでもある。また、周辺に点在する高昌故城・交河故城・アスターナ古墳群・ベゼクリク千仏洞など多くの遺跡群は、トルファン地区文物局の管理下にあり、文物局の職員が派遣されて各遺跡の管理を行っている。

高昌故城・交河故城ともに広大な面積を有する都市遺跡である。高昌故城は紀元前1世紀に前漢の屯田部隊が造った高昌壁に始まり、高昌郡・高昌国・唐代西洲などの変遷を遂げてきた、古代におけるトルファン地域の政治・経済・文化の中心地である。200万㎡以上の面積があり、外城・内城・宮城から構成され、寺院・宮殿・官衙・居住域などが配置されていた。風化が激しく、今後の保存対策は大きな課題であろう。

交河故城は2つの河川に挟まれ、洪水によって形成された台地の上に築かれた遺跡である。紀元前2世紀に車師前国の拠点となり、5～6世紀には魏氏高昌国が交河郡を置き、7世紀には唐代の安西都護府となっている。9世紀には西ウイグル王国の都として栄えた。現在残っている遺構は唐代のものが中心であるが、高昌故城と同様に風化・崩落が激しい。



高昌故城



交河故城

アスターナ古墳群は、カラホージャ古墓群とも呼ばれる、高昌国～唐代にかけての地下式墳墓群

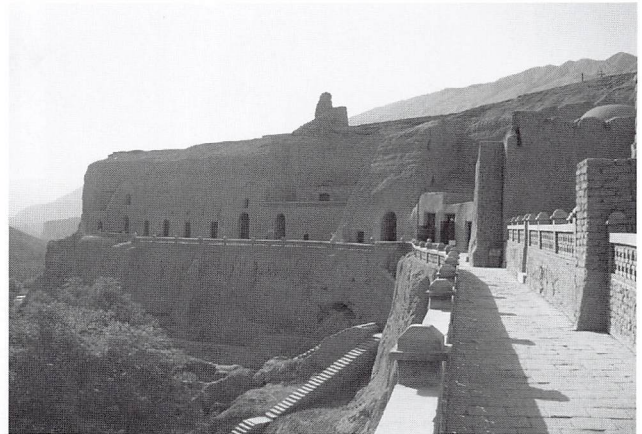
である。高昌故城の北にあり、約500基の古墳が確認されているが、現在開口し公開されているのは3基だけである。管理事務所の入口を入ると、伏羲・女媧と干支の石造が建つモニュメントがあり、その外側に墳墓群が広がっている。ミイラや多くの文書類・絹画、さらには木俑・土俑、鎮墓獣など大量の遺物が出土しており、博物館展示資料の多くを占めている。

ベゼクリク千仏洞は、火焰山山中にある仏教石窟であり、83基が確認されている。麹氏高昌国から元代にかけて造られた石窟であるが、西ウイグル王国時代である10世紀前後のものが最も多い。ウイグル人が仏教以前に信仰していたマニ教の石窟も発見されている。石窟内の壁画などは、イスラム教の浸透やヨーロッパ・日本の探検隊に持ち出されたことで、状態は良くなく、現在では6基が公開されているだけである。

以上の遺跡の他に、蘇公塔やカレーズ、あるいは達坂故城など多くの遺跡がトルファン周辺にある。蘇公塔は1778年に建設されたモスクであるが、イスラム寺院として今でも礼拝の場となっている。また、カレーズについては、カレーズ楽園・カレーズ民俗園などの公開施設がある他、市街地を出ると現在使用しているものを含め、砂漠の中に数多く見ることができる。



アスターナ古墳群



ベゼクリク千仏洞

なお、高昌故城をはじめとしたシルクロード関連の遺跡群は、中国・カザフスタン・トルクメニスタンなど数カ国共同で、「シルクロード」として世界遺産登録へ向けて動き始めている。今まで世界遺産になっていなかったこと自体驚きであるが、今後益々注目を集めることになるだろう。

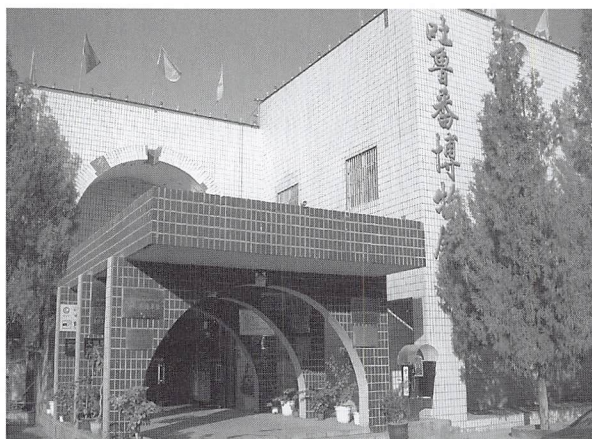
2 トルファン地区博物館の現状

現在のトルファン地区博物館は市街地中心部に近い高昌路にあり、博物館だけではなく文物局とトルファン学研究院が一体となった組織・建物で構成されている。博物館長と文物局長は兼務しており、3つの組織で100人以上の職員が勤務している。門を入ると、多くの中国の機関と同様に警備の建物が右側にあり、左に進むと小さな広場に面して博物館本館の建物の玄関がある。門を歩いて葡萄棚に沿って真直ぐ進むと文物局の建物があり、右奥にはトイレがある。トイレは博物館などの建物内には無く、職員も見学者もこのトイレを使用することになる。更に奥には文物局や研究院の事務所棟が並び、この建物の中に、局長室・副局長室や共産党書記の部屋などがある。さらに奥には職員食堂などがある。

博物館本体の構造は2階建てで、1階の受付（入館料は20元）を過ぎると回転式の改札口があり、ここを通過するとトルファンの紹介ビデオなどを放映する吹き抜けのロビーになる。このロビーを基点に、四方にミュージアムショップや展示室・収蔵庫・執務室・階段へ通じている。1階の展示

室は常設展示室で、出土遺物を中心にトルファンの歴史を扱っている。アスターナ古墳群出土の伏羲・女媧図をはじめとした絹画、金製品など鄯善洋海墓出土遺物などがある。恐竜化石を中心とした展示室は大型資料があるため、2階まで吹き抜けになっていて、2階壁際に回廊式の展示スペースがある。新疆维吾尔自治区は化石の出土地としても著名であり、復原を含めた多くの化石が展示してある。

2階は企画展示室及びミイラ展示室などがある。企画展示室では2007年10月の時点で、トルファンの出土遺物を中心とした「精品展」を開催していた。日本の博物館の特別展・企画展のような開



博物館正面玄関



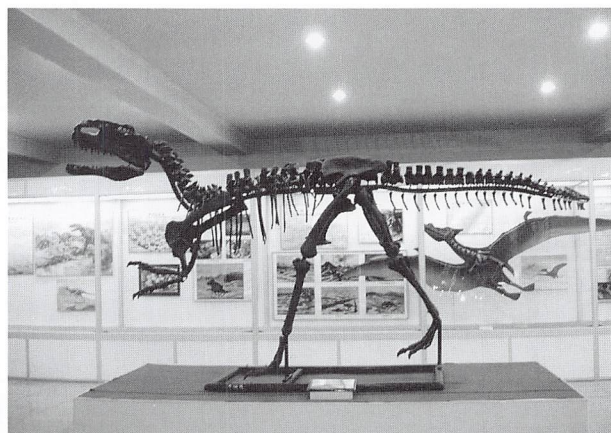
両脇に文物局の事務室がある



1階展示室の展示状況



ミイラ展示室



化石恐竜展示室

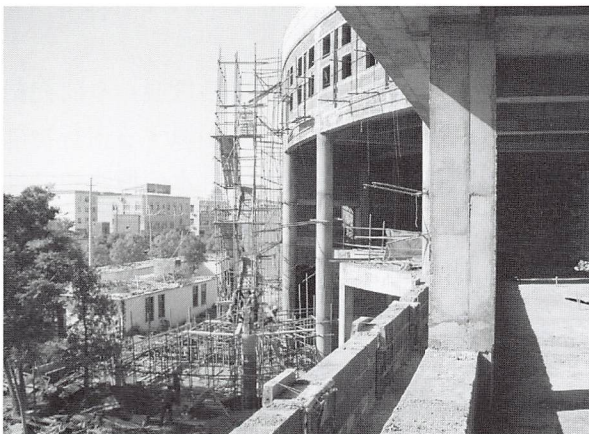
催期間が1～2ヶ月で図録を印刷する展覧会とは違い、図録・リーフレットなども無く夏から継続的に開催しているようである。ミイラ展示室では、アスターナ古墳出土のミイラ数体を展示しており、当時の衣装の復原展示なども行っている。しかし、ミイラの展示ケースは密閉式ではなく、臭気が大きな問題となっている。この他に、2階には今回の協力業務でスライド上映などを行った講座室や、職員が利用する図書室がある。さらに、2階からは恐竜化石展示室の2階へ通じる通路がある。

このように、トルファン地区博物館は、出土遺物を中心とした考古学系と、恐竜化石などの古生物系が同居した博物館であり、歴史系・自然系を扱った日本の総合博物館とも系統の違う、特殊といえる分野を扱っている。まだ開館から20年経過していないが（1989年オープン）、市内の別な場所に新しい博物館を建設中である。

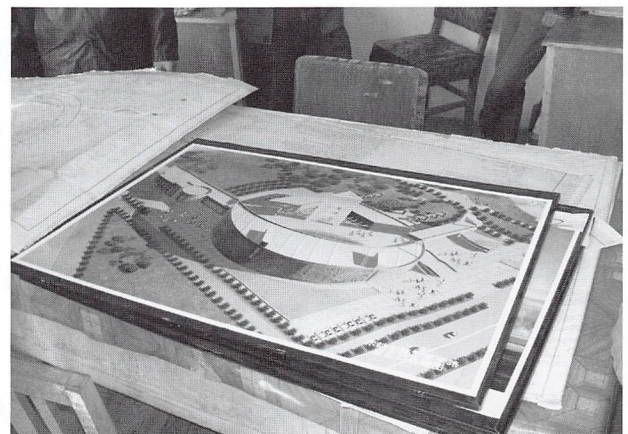
3 新博物館の建設

新しい博物館は、市街地の南東にある木納ル路に建設中で、2008年5月完成、8月オープンを目指して工事が進んでいる。広い敷地に地下1階・地上3階建てで建築面積17,544㎡という大型施設として生まれ変わる予定になっており、ホテルやレストランも併設された新しいトルファンの観光拠点でもある。現在の博物館と同様に、文物局と研究院も同居することになるようである。将来的に活用できる予備の展示スペースの他、コンピュータールーム・国際会議場・トルファン市や葡萄を紹介するコーナーなど、多彩な機能を持っている。

博物館本体部分は円形で、ホテルやレストランなどが尻尾の部分に付くような構造となっている。2階には1,000㎡の展示室（常設展示）の他、特別展示室やコンピュータールームなどがあり、主要な展示スペースが置かれることになる。3階は観光的な面が強く、市の紹介・民俗・葡萄などの資料室となるコーナーが設けられる。地下1階には、480㎡の収蔵庫とスタジオや文物修繕室・整理室などがあり、博物館のバックヤードとなる。国際会議場ともなる講堂は、280人収容・470㎡の規模があり、トルファンの新たな文化の中心となるような設計となっている。



新博物館の建設状況



新博物館の完成予想図

4 今回の協力内容

今回の派遣業務では、特にどの分野の協力が必要か明確ではなかったため、博物館の管理・運営や展示などに関わる全般の分野について扱った。このため、展示・保管・取扱方法に関する資料や東京・埼玉の博物館などの画像を持参し、言葉だけではなく、眼で見て実際の道具に触れるよう派

遣前に準備した。協力方法としては、講座室における講義形式と、展示室での具体的な展示手法やライティングなどについての実技である。

日本で準備した資料と、職員の質問や反応を見ながら内容を変更しつつ、(1)~(11)のような順序と内容で博物館全般に関する協力を行なった。当日の勤務終了後、宿舎で翌日の資料作成や内容の構成を準備した。なお、展示用具や博物館関係図書などの持参資料は、帰国時に博物館へ寄贈した。

(1)日本の博物館の状況

日本で作成したペーパーを配布して、日本における国立博物館から企業設立博物館の存在などを説明した。特に埼玉県における博物館の種類などについて解説した。

(2)埼玉県立さきたま史跡の博物館と埼玉古墳群の概説

埼玉県立さきたま史跡の博物館について、博物館と史跡公園が一体となった博物館の代表例として図や写真を見ながら紹介した。トルファンにおいても、博物館と周辺に分布する多くの史跡が分離するのではなく、博物館から史跡の情報を多く発信するようなシステム作りが必要だと強調した。新博物館においては、トルファンを訪れる観光客は、最初に博物館を見学してから各史跡を巡るようなルート設定の検討が重要であることなどを説明した。

(3)日本の博物館・資料館の特色と説明

日本で撮影した博物館や資料館などの画像を見ながら、その展示構成や特徴を説明した。自然系から歴史系、あるいは特定分野の博物館・資料館及び史跡のガイダンス施設などについて、外観や展示から資料の収蔵状況、さらには取り巻く環境まで概括的に紹介し、各施設の特徴や長所短所を確認できるよう説明した。また、東京の庭園（六義園）の写真も見てもらい、景観に溶け込むような案内標識やトイレのデザインなども今後の博物館の参考にしてもらった。

(4)博物館における広報

当初、普及事業や広報に関しては予定していなかったが、休憩時間等に広報に関わるような要望があり、急遽取り上げたものである。日本の博物館のホームページを紹介し、世界中どこからでもアクセス可能なHPの作成が必要であることを話した。トルファンには研究院のHPはあるが、博物館のHPはない。また、無料配布する博物館のチラシや年間行事予定など、埼玉県の例を見せて、リピーターの確保に努めていることも説明した。トルファン地区博物館の場合は、中国内外の観光客を主なターゲットにしているが、地域の人にも宣伝する必要があることを話した。

刊行物については、埼玉県内各館の年報・ガイドブック・展示図録（特別展と常設展）や研究紀要など持参資料を配布して、日本の博物館で発行している書籍を見てもらった。類似する刊行物は中国の博物館でも発行しているが、入館者数など実績を毎年記録する年報など、日本の博物館では行政資料として利用できるものもあることを紹介した。

(5)普及と活用

持参した普及キット（まがたまづくり）を紹介するなど、展示だけではない博物館活動の例を説明した。(4)で話したように、観光客ばかりでなく地域の人、特に子供たちに来館してもらえるよう、学校とのタイアップを進める必要がある。埼玉県では2003年に、博物館と学校の協力のためのプログラムを作成しており、授業の一環で来館する・要請のある学校へのデリバリーなど、いくつかの事例を紹介した。こういった普及活動により博物館の幅が広がっていくと話した。また、ミュージアムショップの充実についても、サービスの一環であることを説明した。

(6)資料の管理と保管

埼玉県の県立博物館の収蔵庫画像などで、博物館で最も重要な資料の管理について説明した。資料の保管・管理については、日本とトルファンでは環境が大きく異なり、日本で行っているような温湿度管理を適用できない。しかし、基本的な考え方は同じであり、埃や有害生物の侵入を防ぐた

め、清潔であることが大事であると強調した。収蔵庫の出入りのチェックや捕虫トラップの設置などから、資料の薫蒸殺虫・館内の消毒など、年間を通じた対策が必要である点を説明。モントリオール議定書によって使用できない薬剤もあり、これらの知識も必要があることなどを解説した。

(7)博物館におけるユニバーサルデザイン

持参資料と現地で作成した資料で説明。埼玉県で発行している、バリアフリー・ユニバーサルデザイン関係のパンフレットなどを参考にして、これからの博物館で重要な意味を持つことを強調し、是非新博物館で推進してほしい旨話した。英語を中心とした外国語表記はもちろん、トルファンではウイグル語表記も必須であり、他に点字や音声ガイドあるいは車椅子用の諸施設の必要性も説明した。実際にプロジェクター画面上に着色した字を描き、色覚バリアフリーの実見も行った。また、「立入禁止」「写真撮影禁止」などの表記も外国人にも分かりやすいマークに統一するなど、ユニバーサルデザインを推進し、建物や資料だけではなく、この分野でも注目される博物館になってほしいと話した。

(8)展示方法について

展示に対する考え方や種類、展示計画の企画立案等、理論的なことから具体的な展示に向けての準備方法等の説明を講義方式で行なった。同一資料を使用しても、展示担当者のテーマ性や見てもらいたい部分の違いなどで、同じ展示はできない点を強調し、企画・立案の重要性を話した。また、トルファン博物館でもそうであるように、展示には大きく常設展示と企画展示があり、それぞれの特徴と重要性を確認してもらった。資料によって異なる適正な温湿度や照明方法なども、収蔵だけではなく展示にも必要であることを説明した。その後、持参した展示道具(ピンピッター・ピクチャーレールほか)などの使用方法を具体的に解説した。

(9)トルファンの遺跡群と博物館の連携

埼玉古墳群の説明でも紹介したが、トルファン博物館では高昌故城や交河故城あるいはアスターナ古墳群など周辺の遺跡出土の文物も展示しており、これら遺跡群を野外博物館と位置付けてトルファン博物館と一体となった活用が必要であることを改めて説明した。博物館で各遺跡を紹介・説明するだけではなく、現地においても博物館の情報を発信する、双方向の活用・利用を強調した。これにより、博物館の存在意義はさらに高まる。

(10)遺跡の保存と整備について

別添の写真でも分かるように、交河故城や高昌故城は主に構築材や自然環境的なことから、遺跡全体の消耗・崩落が進行している。このまま放置しておけば将来ある時点で消滅が視野に入ることも考えられる。早い時期に保存対策の検討に入る必要性を話した。日本と比較して、規模が広大であることや土地そのものの制約から、保存が困難であることも察しがつく。しかし、これら消耗の激しい文化財の保存は急務であり、各方面の支援や協力が必要であろう。

(11)展示室での具体的な展示方法やライティング及び解説パネルの設置方法等

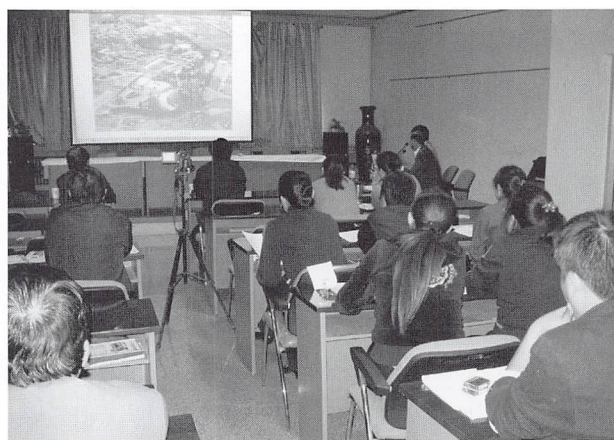
展示室においてケースや資料を前にして、具体的な展示方法について実技的に説明した。出土資料であるが、文献資料・絵画資料も多く所蔵しているトルファン地区博物館では、特に、卷子類や軸物の展示が、見る方にとっても、資料にとっても良い状況とは言えず、1級資料でありながら資料が生かされていない点など指摘した。また、照明も適正照度と言えないことや、ライティングについても方向・角度などを具体的に示した。

展示ケース内の資料配置については、地震が少ないことから、資料の固定などの安全対策は日本とは異なっているため、展示台の効果的な利用や解説文や写真パネルの設置位置などの原則を話した。展示資料によって照度を変えなければいけないことも、ルクスの設定基準を説明した。

上記のように11の項目についての講義・実技形式で協力を行なったが、質問や感触あるいは日常

的な会話などから、資料管理や展示技術そして普及・広報に関心が高かったように感じた。出席者からは質問も多く寄せられ、ビデオ録画の他にも熱心にメモを取る姿が見られ、日本の博物館の運営や展示方法に対する関心が高いことを示していた。資料の違いや自然環境の相違などはあるが、基本的な考え方は理解してもらったと考えている。特に、持参したピクチャーレールやピンピッターには強い関心が寄せられたが、ピクチャーレールについては、帰国時に訪問した新疆ウイグル自治区博物館でも見かけなかった。展示の幅が大きく広がる道具であり、是非新しい博物館では採用してもらいたいと考えている。

派遣期間中にはトルファンテレビの取材があり、帰国後は中国文物局・新疆ウイグル自治区政府やトルファン学研究院などのホームページに「日本文物专家来我地区就吐鲁番新博物馆的管理营进行业务交流和指导」といった紹介をされ、派遣への注目と関心、そして何よりも新博物館への期待の高さが窺える。



講座室の様子（埼玉古墳群の紹介をしている）

おわりに

現在、日本の博物館事情は、指定管理者制度の導入や人員削減・予算削減などで、萎縮した状況にあると感じているのは、私一人だけではないと思う。特に埼玉県では、県立博物館施設の再編整備で、組織と名称が変更されたが、この再編で博物館の明るい将来を見出した学芸員は果たしてどれだけいるであろうか。また、開館20年を待たずして新たな博物館建設を進めているトルファンに対して、築40年を経た当館の施設や展示の現状を見た時、他国の博物館建設の協力することに躊躇いも感じた。しかし、国内や県内の枠にとらわれず、これまでの博物館に関する知識や技術と、考古学・埋蔵文化財の専門分野を生かした協力ができると考えた。さらに、この停滞した現状を少しでも打開するため、博物館活動における国際協力や海外の博物館との連携など、今後の博物館像を展望する一助になるのではないかと思い、今回の事業に参加したものである。

今回の協力がどの程度トルファン地区博物館の新館建設の役に立てたか、不安な部分もある。また、環境や状況も異なる日本の博物館の手法や技術であるので、中国風にそしてトルファン流にアレンジして、新博物館の管理・運営に少しでも活用していただきたいと願っている。今回の派遣で、多くの友人達が出来た。このことは私にとって大きな収穫であり、彼らと再会できることを含め、新館を見学する機会を楽しみにしている。また、北京で合流した北九州市立自然史・歴史博物館の松井和幸氏とは、補完・協力しながら業務を進めることができ、感謝している。

今回の派遣では、李肖館長（局長）・張勇主任・丁蘭蘭副館長をはじめとした、吐魯番地区文物局・博物館の方々や(財)自治体国際化協会北京事務所の橋本浩之氏・埼玉県国際課には大変お世話になっ

た。さらにイタリアから調査に来ていたブルーノさん・中国科学院の蔣さん・新疆文物考古研究所の呂さんなど、現地で多くの研究者達にも知り合った。特に丁さんには、派遣期間中を通じてお世話になった。ここであらためてお礼を述べておきたい。また、トルファン地区博物館では、日本の博物館を写真で紹介したり、各種リーフレット・パンフレットを配布したが、オリент博物館・行田市郷土博物館・鉢形城歴史館・歴史と民俗の博物館・川の博物館・嵐山史跡の博物館・自然の博物館・埼玉県文化振興課には写真撮影や資料収集などで協力頂いた。文末ではあるが感謝したい。

なお、ここでは派遣業務の内容を中心に述べたため、各遺跡の現状や保存状況については詳しく触れられなかった。遺跡の保存と整備に関して関心のある方は、埼玉考古43号に「中国トルファン盆地の遺跡群について－保存と整備の視点から－」と題して執筆したので、そちらを参照頂きたい。



博物館入口での記念写真